我思う、故に我在り。

Hon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我思う、故に我在り。

【Ｎコード】

Ｎ１２４４Ｆ

【作者名】

Ｈｏｎ

【あらすじ】

白銀に輝く満月の下に出会った神秘的な男性は、たまたま居合わせた少女に、とある御伽噺を語り始める。果たして、彼の語る御伽噺とは？

プロローグ（前書き）

初めて、書かせていただきます。Ｈｏｎと申します。
何分、素人同然なので誤字、脱字があると思いますが、目を皿にして読み返したので多分無いと思います（笑）
何卒、よろしくお願いします。

台詞を修正いたしました。ご指南ありがとうございますっ！

プロローグ

――眠れない。

満月の夜は、毎回、何故か眠れない。

いつもなら、部屋で本読んだり、テレビを見たりして睡魔が襲ってくるまで待つのだけれど、その日は、何かに誘われるように散歩をすることにした。

外に出ると少し感動を覚えた…真夜中だからなのか、空気に淀みがなく肺に染みわたり、夜空に視線を向ければ、銀色の満月が上がっているから。

川沿いを歩きながら、淀みのない空気を吸い――ふっと、こんな素晴らしい夜ならどこかで狼男が遠吠えをあげているだろう。などと思ってみたりする。

「ん、なに考えてるんだろ、私」

17歳の女の子が考えることではないなぁ～と一人、呆れてしまった。

気が付くと、堤防沿いにある公園まで歩いてきていた。

昼間こそサッカーをする子供たちや犬と散歩する人達がいるが、真夜中は誰一人居らず、街灯も点っていない。

しかし、不思議と恐怖心はなかった。たぶん月明かりで照らされて、公園が隅から隅まで見て取れたからだと思う。

――貸切みたい。

ちょっとした優越感に浸りにんまりと微笑みながら、堤防を降り近くのベンチに座り、空を見上げた。

「本当。真ん丸で、綺麗な月……」

どれだけ時間が過ぎただろう、まるで魅入られたかのように銀色の月を眺めていると、不意に銀色の光を遮る影。

・・・・・そこには、男の人が立っていた・・・・・

風が吹き、その人の髪が揺れる・・・まるで月の光を吸収したかのような長い銀髪、暗闇の中でも尚輝こうとする銀の瞳、黒い袖をまくったカッターシャツに黒いズボン、歳は２０代後半位だと思う。一瞬、あの月から来た使者なのでは？と思わせるほど神秘的な感じの男だった。

「今晩は、お嬢さん。こんな真夜中に一人で散歩とは、感心しませんねぇ」

その人は、まるで英国の紳士の様に、ニッコリ笑い喋りかけてくる。

でも、返答より先に出た言葉は。

「月が見えないので、どいてほしいんですが」

なぜか、棘がある言葉だった。

男は、え？と言う顔をした後、あわてて飛びのき月を見上げる。

「ふむ。確かに今夜の月は、特別綺麗だ……見なければ損ですね」

月を見てうんうんと一人納得した後、堤防から降りてきて当たり前のように私の横に座り月を眺め始めた。
……しばらくの沈黙の後。
「よく、月を見に来られるんですか？」
「いえ」
即答……今度は、気まずい沈黙が始まる。
実のところ、この人が喋り掛けてくるも傍にいる事も、あまり不愉快ではない。
ただ、今は静かに月を見ていたかっただけなのだけ。
「……では、あまりに月が綺麗だから――」
「いいえ。」
「――そ、そうですか」
なのに、懲りずに喋りかけてくる。
流石にムッとして、今度は、喋り終わる前に返事で遮った。
「ふむ」
まだ、喋るか！と睨みつけようとしたけど……その人の顔を見た瞬間、苛立ちが嘘のように消えてしまった。
さっき、光源をバックにしていて、顔を確認できなかったけど、近くで見るとなかなかいやっかなり顔が整っていて…その――美形だ。
その人は、すまなさそうに頭を掻きながら。
「どうやら、私の所為で機嫌を損ねさせてしまったようですね。

申し訳ありません」

徐に立ち上がって、頭を下げてきた。

私は瞬間、何してるんだこの人はと言う顔して、慌てて。

「い、いえ！そこまでして頂かなくても！私はただ静かに月を見ていたかっただけですから」

「ふむ、なるほど……ならば黙っているとしましょう」

言い終わると、また腰掛けて月を眺め始めた。

今度は、落ち着いた感じの沈黙が始まる。

私は、月を眺めながら、横目でその人をちらちらと観察してみた。どうやら月を眺めながら、うむ。とか、やはり無粋でしたか。とか、自己反省しているようだった。他から見たら、怪しい人みたいなんですが。

それにしても、綺麗な顔をしている――特に、髪なんて女の私が羨ましくなるぐらいに。どこの国の人なんだろうか？何で夜中にこんな所にいたんだろう？……私は、いつの間にか、月よりその人の方に興味がわき始めた。

「あの…どこから来られたんですか？」

「む？……イギリスのロンドンから来ました。貿易関係の仕事をしていまして、世界中を飛び廻っているんですよ」

瞬間、考え込んだ後、微笑みながらすぐ答えてくれた。

なるほど、通りで紳士的なはずだ。本当に英国の人だったとは。

その人は、また考え込んで……

「なぜ、そんなことを聞くのですか？」

「え！いえ、その！顔つきとか髪の色とか見て、どこの国の人かなぁ～と」

あぁ、なるほどと納得しているのか、手を顎に当てて仕切りに頷いている。

……この人、その場で考えをまとめないと納得できない人なのでは？

と、失礼なことを考えていると不意に。

「ん～では、あなたは、どこから？見る限り、日本人に見えないのですが」

……あ、そうでした。

「えーと、あの育ちは日本なんですが、その生まれはヨーロッパ辺りらしいです」

私は、慌てて手をパタパタさせながら説明する。

昔は兎も角、ここ最近周りからも何も言われなかったから、完璧に自分が外人と言うことを忘れてた。

紅くなった顔を押さえながら、自分への不甲斐なさにため息を漏らしていると。

「ふむ。らしい…ですか。これは、また失礼なことを聞いてしまいましたか？」

「あ、いいえ！父が詳しく教えてくれないんですよ！ため息したのは、自分が外人ってことを忘れていたのが不甲斐なく・・・・・・・あ」

申し訳なさそうに言う言葉を遮るつもりが――なにバラしてるんだ、私！！

さらに紅くなった顔を押さえながら俯いてしまった。

――沈黙……こんな時は、相手があははははとか、笑ってれる方が気が休まるのだけれど。

どうやら、また考え込んでいるようで、何も話し出さない――もしかして、私の言葉と反応を脳内で分析してるのでは。

うぅ、かなり恥ずかしいんですけど。

とほほ、と涙目になっていると、それを見てまた勘違いをしたのか、驚いた顔して。

「っ！……あ～どうも私が来た所為で、いろいろ台無しになってしまったようですねぇ」

「えっ！いえ、気にしないでください。悪いは私ですし！」

慌てる私を他所に、少し微笑みながら。

「いいえいいえ。ここはお詫びに一つ、そうですねぇ……御伽噺でも聞いて頂きましょうか。」

彼は、コホンと咳払いを一度すると……

……ゆっくり不思議な物語を語り始めた。

プロローグ（後書き）

読んで頂いて、感謝感激です。
意見、感想がありましたら宜しくお願いします。

第一節：ある魔術師の日常。（前書き）

さて、御伽噺が始まります。
で、フッと気が付いた事が、御伽噺って昔話とか伝説を語る事を指すらしいんですが……すいませんっ！ぜんぜん昔話とか、伝説とか関係ありませんっ！
物語みたいな感じで、軽い感じで使ってました（泣）
もし、そんな方向の話を期待していた方は、すいませんが期待しないでください。本当に申し訳ありません。

メイドの台詞を修正いたしました。ご指南ありがとうございますっ！

第一節：ある魔術師の日常。

イギリス、幻都ロンドンの端にある森の中、まるで隠れるようにして建つ屋敷にその者は、住んでいた。

「これはぁ…さすがに、そろそろ整理しないといけませんかね？」

自分の周りに高層ビルのように立ち並ぶ本に目を向けながら、我ながらよくここまでと半ば呆れるかのように言葉を漏らす屋敷の主。

銀色の髪を後ろで束ね、目が悪いのか銀縁メガネを掛け、白いシャツに黒いズボン、どこでも歩けるようだろうか皮のブーツ履いている、歳は１０代半ば位だろう――名をギュラード・ミュラージュと言う。

彼は、こう見えて『魔術師』と言う裏の顔を持っていた――といっても、半人前なのだが。

そのため、どうにかして周りの魔術師に追いつこうと日夜勉強に励んでいるのだった。

む～～～っと、魔導書やら辞書やらが詰まれた本の山を睨んでいると、その影から声がかかった。

「失礼します。マイ、マスター」

影の向こうから現れたのは、綺麗に揃ってお辞儀してみせるメイド姿の４人。

いくら、小さい屋敷と言えど、庶民から見れば豪邸だ。

もちろん様々な事を補うためにメイドは、必要な訳で…大体一人で、洗濯、掃除などしている暇がない。

「ん？どうかしましたか？スペードに、ハートに、ダイヤに、クローバーみんな揃って。」

姿は皆、黒髪でメイド姿だが、髪型、性格、体格がぜんぜん違う。まず、すらっとした長身で、長い髪を束ねず後ろに降ろし眼鏡かけている彼女が、メイド長も勤めるスペード。

性格は、沈着冷静で何でもこなす。

「はい。朝食のご用意が整いました。こちらにお持ちしますか？」

「えぇ、そうしてくれると助かります」

次に、すらっとしているが、身長はそこそこ。髪を後ろで団子にしている彼女が、ハート。

性格は、几帳面で清掃、整頓を担当。

「先月から、かなり気になっていたのですが、そろそろこの部屋を、片づけさせていただてよろしいでしょうか？」

「丁度私も気になり出した所だったんです。頼めますか？」

次が、髪を短めにしているダイヤ。

性格は、温厚で庭の世話を担当。

「その…庭で…また、二人が乱闘中でして……その」

「はぁ、またですか……ま、何時もの事ですし、その内納まるで

しょう」

あの『二人』は、仲良くするという事が出来ないのでしょうか？と、無意識に溜息をもらす。

最後に、長い髪を左右で止め十代位の少女にしか見えない彼女が、クローバー。

性格は、明るくムードメーカー？的存在。料理、機械並びに屋敷周辺の結界管理を担当。

「報告でぇーす。０７３５時に、０２５並び０４５結界に反応。何か微弱な魔力を持った物が侵入したみたいでぇす」

「侵入者？」

クローバーから、手渡されたレポートにさっと目を通すと、時計を見て、思考を回す。今の時間、ここまでの距離、相手の魔力の量等を少し考えてから指示を出す。

「ふむ。侵入から、時間経ってますから浮遊霊の可能性もあり、ですね。一応念の為、その結界周辺の索敵をして置いてほしいですねぇ。パートナーに、スペードかハートをつける事を許可しますから、お願いします」

感度が高すぎるのか、最近、霊の類にも敏感に反応しているようです。感度を落とすべきでしょうか……と、本日何度目かの溜息をもらす。

以上が、我が屋敷のメイド達だ。もちろん、魔術師の屋敷のメイドだけ在って普通のメイドではないのだが。

みんな、各自仕事に戻ろうとする。そんな中。

「あ、あのぉ…マスター」

「はぁ。言いたい事があるのなら、はっきり言いなさい。ダイヤ」

スペードが、掛けているメガネを押し上げ、呆れた感じでダイヤを指導している。もしかして、乱闘中なにか壊しましたか…あの二人。

「は、はい！スペード！そのっマスター。さっきの話には、続きが……」

「あー…。やっぱり、あの二人なんか壊しましたか？」

頭痛を感じる。この間は、自動車を大破させ、その前は、薬草園を炎上させた。

頭を抱えて、唸っている私を見て、慌てた様子でダイヤが言う。

「いいえ！違うんです！ええっと、乱闘は終わって、そのあのっ侵入者と戦闘中なんです！！」

ファーーーという感じで言い切ったダイヤ……しかし。

「なっなんですって！？なぜその様な大切なことを遠回りに説明するのですか、あなたはっ！！」

冷静なはずのスペードが、肩をワナワナ震わせながら怒鳴る。言い切ったことへの満足げな表情から一転、どんどん縮こまっていく、ダイヤ。

まぁ、怒鳴りたくもなる気持ちは分かりますが、今はそれどころじゃないですね。

私は、目を閉じ一気に思考を巡らせる。

「侵入からここまで来るのに時間がかかっていたのは、戦闘の所為ですか。しかし、この屋敷に侵入する気なら、結界に引っ掛からないように侵入してくるはず。もし、魔術の知識のない客人か、間違って入った人だったら――」

ぶった切られる客人。消し飛ぶ人だったもの――いやな想像が頭を過ぎる。

「あは、あはは。もう、手遅れだったりしてぇ～」

「有り得る。あの二人なら」

苦笑いを浮かべて言うクローバーと、真剣な面持ちでバラバラだったら、片付けるのが大変そうだ。と恐ろしいことを言ってるハート。

サァーと頭から血の気が失せる――物凄く嫌な予感がしますね。

頭を振って想像を追い出し、メイドたちに一息で指示を出す。

「スペード、説教は後回しにして、ハートとダイヤを連れて、侵入者の保護をお願いします。クローバーは、感知した結界周辺を索敵して、何処で戦闘が起きてるかを私とスペード達に定期的に報告して下さい。後あの二人と戦闘になっても手を抜かない様に、こっちが拙い事になりますから。侵入者が、敵だと判断できる場合にのみ、二人の援護をお願いします」

「畏まりました。マイ、マスター。では、その様に」

メイド長であるスペードがそう返事しお辞儀を返すと、私に反論

すること無く更に細かい指示を他のメイド達に伝え始める。
彼女達の仕事は、いつも完璧だ。微塵の不安もない。しかし、あの二人は別格です。

「……普通の侵入者で、あって欲しいものですねぇ」

どちらにせよ、捕らえて調べない事にはなんとも言えませんし……死体に口無しだけは避けたい所です。私は、ネクロマンサーでありませんし…いや、手が無いわけでは……なぜ、侵入者を、心配しないといけないんでしょう？と思考をめぐらしながら、自分自身も現場に向かう準備をし始めた。

第一節：ある魔術師の日常。（後書き）

と、こんな感じになっております。
御伽噺を語るシーンから、一応は昔の話なので……御伽噺でいい――わけないですよねぇ（泣）
こんな馬鹿な作者ですが、今後も何卒よろしくお願いします。

第二節：二人の相性。（前書き）

やっと、第二節……そろそろ、ペースダウンの予感（汗）
誰かっ私に書く時間をっ！

かなり擬音を使用しております。見苦しいかもしれません。
シリアス戦闘の場合は、極力使いませんので（苦笑）

第二節：二人の相性。

森の中、まるで滑る様に駆け抜ける３つの影。
２つの影から逃げるように先頭を走るのは、人一人分位の大きさは有ろうかと言うぐらいの金色の犬。
追う影の１つ、まるで西部劇から抜け出してきたかのようなカウボーイ風の女性が叫ぶ。

「くっそー！チョロチョロ動き回りやがって、さっきから一発も当たりゃしない！」

そう言いながら、右手に持つリボルバーのリロードを開始する。
バシャと回転式拳銃が中程から折れ、露わになったシリンダーから、薬莢が飛び出し、空になったシリンダーに弾丸を流し込む。
常人の慣れている者でも、２６秒以上掛かるリロードを、走っているはずの彼女は、数秒でやってのける。
その動きは、普通の人が見たら、シリンダーから薬莢が飛んだと思ったときには、リロードが終わっていた――と言えばお解りになるだろう。
もう一つの影、まるで戦国時代から抜け出してきたかのような女性武者が、目を細めて忠告する。

「あの賊、甘く見ぬ方がよいぞ…あの動き、もしかすると」

それは、如何なる歩行術なのか。まったく、鎧の騒がしい音を立てずに走り続ける、女武者。
両手を、太刀に添え、いつでも抜刀が出来る体制で敵を睨みつける。
まるで対極な得物を持ち、まるで違う時代から来たような姿をし

た二人。
この追う『二人』こそ、『乱闘』騒ぎを起こしていた張本人であった。

カウボーイの格好をした女性、名はアイリ・オーキンス。
数多の銃器に精通し、銃撃以外にも銃を使用した接近戦闘を得意としている。

武者の女性、名はローゼット・ヒーリッヒ。
剣、槍を使った様々な武術を得意としている。

二人とも、半人前の魔術師に雇われた武術の師匠であり、善き護衛であるのだが……

「おぉ、いいこと思いついた！」

アイリが、指をパチッと弾いてみせる。
――大体、こう言うときとんでもない事を言うのだ、この女は。
と、思いながら、なにを？と尋ねるローゼット。

「この獲物を、殺った方がさっきの勝負の勝者って事を思いついた！と言うか、決めた！」

「はぁ～。なにを言い出すかと思えば。これは、遊びではないのだぞ。取り逃がした場合、ギュラードに危険が及ぶ可能性を考えぬのか？」

「おやおやぁ～そんなこと言ってぇ～武人のロゼ様は、自分が負けることが怖いのかしらぁ？」

呆れ顔のローゼットに、あらか様に挑発するアイリ。
その言葉に、ローゼットの表情が変わる。
「……なにを言っている。私があの様な者に後れをとるはずが無かろう」
怒りが染み出したような声で答えが返るのを聞いて、扱い易いねぇ、ロゼは。と思いながら、シシシッと笑うアイリ。
「じゃ、決まりだな。と言うか、勝負始まってるから」
にこやかに言うや否や、即座に獲物に標準を着けて引き金を絞る。
――――――ガン！！　ガァン！！
鋭い発砲音と共に撃ち放たれた二発の弾丸が、獲物を貫こうとした襲い掛かるが。
――――――ギャン！　ガキン！
金属の甲高い音と共に一振りの太刀によって、弾き飛ばされた。
「ちっ！邪魔するんじゃねぇ！」
「ふんっ！そんな事だろうと思っていたわっ！」
ローゼットは、悔しがるアイリに、そう言い放って太刀を振るう。
「ふっ！」

太刀が獲物を捕らえようとした瞬間。

――――――ガガァン！

――――――ギンガキィーン！

太刀の側面に弾丸が食い込み、切っ先が反れ地面に突き刺さる。

「なっ！！――――――アイリィィィ！」

ローゼットが叫びながら睨みつけるがどこ吹く風。

「撃った所に、剣が振り下ろされただけですわぁ」

口に手を当てて、おほほほ～とワザとらしく微笑んでみせるアイリ。

左手にはしっかり、大型拳銃『S＆W　モデル3　スコフィールド・カスタム』を持っている…要は、弾く気満々だったと言うことだ。

そんなアイリにローゼットは、肩をワナワナ震わせていたが、不意に振るえが止まる。

「――ふ、ふふふっ。それでは、仕方がないな」

アイリは、あれぇ～テッキリ、もっと言い返してくると思ったんだけど。と首を傾げる。

表情を確認しようにも、斜め前を走っているため確認できない。

「何をしている。早く、賊を倒すぞ」

「あ、あぁ・・・」

首を傾げるアイリを他所に、太刀を、獲物目掛けて振り下ろす。
太刀は、弧を描き横薙ぎに振り切られ――

――――――ガキン！！

――鈍い金属音が響き渡る。
ローゼットの太刀は、アイリの右手に持った銃、『エンフィールドＮｏ２・カスタム』で受け止められていた。
アイリは、剣戟に耐えながら叫ぶ。

「痛っ～～～！て、てめぇ～！、何しやがる！！」

右から左に振り切られた先は、獲物ではなくアイリの顔面だった。
ローゼットは、黒い笑みを浮かべ片手持っていた太刀を両手で持ち直しながら、さらに太刀に力を込め。

「あぁ、すまない。汗で滑ってしまったあぁぁぁぁ！」
「そう言いながら、押し切ろうとすなーーっ！！」

すでに、獲物――『侵入者』のことは、頭に無く。ついには、剣と銃の鍔競り合いから、大乱闘へと突入していく。
自己中心的な不真面目な性格＋真面目で怒りやすい性格＝騒動が起きないわけが無い……と。

第二節：二人の相性。（後書き）

銃の解説（知らない人のために）

Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｎｏ．３（Ｓ＆Ｗ　モデル３　スコフィールド）
米国の有名拳銃メーカー、スミス・アンド・ウェッソン社製のシングルアクション式リボルバー拳銃。通称「アメリカン・モデル」。
南北戦争が終了した１８７０年に開発され、Ｓ＆Ｗの特徴である金属薬莢と中折れ式装填を採用。なお、中折れ式とは銃身を前に折ると、空薬莢が全て弾き出されるタイプである。
Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ社としては珍しい大口径拳銃。
日本での制式採用は明治七年、制式名称は「壱番型元折式拳銃」。

口径：４４口径（約１１．２ｍｍ）
全長：３４．３ｃｍ
重量：１．３３０ｇ
装弾数：６

エンフィールドＮｏ．２
エンフィールドＮｏ．２（Ｅｎｆｉｅｌｄ　Ｎｏ．２）は、１９２７年にイギリスで開発された中折れ式ダブルアクションリボルバー。

全長　２６０ｍｍ
重量　７６５ｇ
口径　．３８Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ、．３８０エンフィールド
装弾数　６発
作動方式　ダブルアクション／シングルアクション
製造国　イギリス

製造　ＲＳＡＦ社

アイリが使う両カスタムは、ガチガチに改造を施してしまっている為、ほぼ別物といっていい仕様になっている……らしい（笑）

第三節：来客（前書き）

次回は、更に時間が掛かる予定。
何故か、書いたり消したり繰り返す私。……時間無いのに（滝泣）

誤字を発見し、修正いたしました。半分寝ながらの確認がまずかった見たいです（汗）

第三節：来客

森を劈(つんざ)く銃声、木々を次々伐採していく斬撃。
魔術師の服に身を包んだ私と手にそれぞれの武器を持ったメイドたちが、見渡す限り荒れ果てた森を前に、唖然としている。
森と言うより……もうここだけ荒野ですねぇ。

【その辺りが、最後に感知した場所でぇーす。間に合いましたかぁ～？】

と、誘導していたクローバーから、念話が送られてくる。

「間に合った、んでしょうか？」

「……森の木々や土地の方は手遅れの様です」

半目で私が呆れたようにぼやくと、ちょっと間を置いて的確にスペードが答える。
ふむ。そこかしこにある真新しい切り株。ボコボコに、抉れている地面。確かに手遅れの様です。
遅れて来たハートは、誰が片付けると思って…と、肩を震わせている。そんなハートを私も手伝いますからっと傍らにいたダイヤが慰めている。
私の推測では、元に戻るのに2～3年かかると思うのですが。

「保護対象は、無事のようです」

と、冷静にスペードが荒野の真ん中を指し示す。
荒野には、あの戦闘を目の当りにしたのか呆然としている物体。

「犬？いえ、狼でしょうか？にしても、大きいですねぇ」

狼は、我に返ったのか、辺りを見渡し我々に気が付いた様だ。物凄い勢いでこちらに駆け出した……若干涙目で。

犬の様に見えた姿から、駆け寄って来るにつれ徐々に人型に変化していく――これは。

「なるほど。人狼『ワーウルフ』ですか」

ワーウルフ、ウェアウルフ、リカントロープ、ライカンスロープと、様々な名で呼ばれる獣人の一種。簡単に言ってしまえば狼男である。

この辺り。と言っても、数百キロ離れた森にだが、そんなに珍しい者ではない。珍しい所か、数が多いほどだ。

徐々にその姿を現していく。

髪は、金色に輝き毛先にゆくにつれて、白くなっている。足は、スレンダーに長く、ふくよかな胸。

ふむ。どうやら、女性の様ですねぇ。と、観察していると――不意に、目の前が真っ暗に。

「……見えないんですが」

「マ、マスター！！何をマジマジとご覧になっておられるのですかっ」

「そうです！彼女に失礼ですっ」

目を隠したスペードとダイヤが怒鳴り始め、傍ではハートが仕切りに頷いている気配がする。

ふむ。別に、裸体に興味がある訳ではなく、その肉体構造がどうなっているのか興味があるだけなんですが。

「私は、別に裸体に興味があるわけでは、なく――」

「ダイヤ。取り合えず、彼女をマスターに見せない様にした方が良い」

「はい！ハート！とりあえず、エプロンで遮りますっ」

「私とハートは、お二人を止めて参りましょう」

「――聞いてませんね」

なぜか、イライラした様子でダイヤに指示を出し始めるハート。全く、非常識なのですから、マスターは…と、ブツブツいいながら行動するスペード。

指示に、いつもより遥かにハキハキ受け答えするダイヤ。マスターが取られちゃいますっ。と言いながら。

慌てぬ主を他所に、自分達でその場の最善な方法を取っていくメイド達。

優秀で嬉しいのですが……なんでしょうか？この重い空気は。

―約３０分後―

漸く落ち着いてきた。

埃だらけになった、自分の眼鏡を拭きながら辺りを見渡す。

スペード達の的確な行動によって、今は、もう屋敷に戻ってきており。目の前には、さっきまで暴れ回っていたローゼットとアイリが、正座しながら俯いている。

スペードとハートが取り押さえようとしたのだが、銃弾と剣戟の

雨の中に近づけず、結局私の声で漸く止まりました。
さっきまで、アイリが…ローゼットが…と、なすり合っていたが、今はご覧の通り静かだ。
いつも、静かなら言うことないんですが。と、私は何度目になるだろう溜息を吐き出した。

侵入してきた彼女は今、クローバーが持ってきた洋服に着替え中。
念のためにハートとダイヤが付いているが、問題ないでしょう。
逃走の隙があるのに、逃げない侵入者なんて聞いたありませんし、見たこともありません。

「お待たせ致しましたぁ〜。マスター」

寝室の扉から、着替えを手伝ったメイド達が出てきた。
どうやらこっちも終わった様です、が。

「……何故、メイド服なんです？」

「すいませ〜ん、マスター。我が屋敷には、女性が多くても、私服を所有しているのは、アイリ様とローゼット様だけなんですぅ」

「貸して頂いても宜しかったのですが…何分、サイズが合わず…仕方なくサイズの合うメイド服に……」

仕方ないんです。と、胸を張って訴えかけてくるクローバーと申し訳なさそうに言ってくるダイヤ。確かに、女性の私服なんてある分けがないですね……男魔術師の屋敷に。

「あぁ〜アタシのじゃデカ過ぎるもんなぁ〜」

「私の服なら、合いそうに見えるのだが？」
と、いつもの調子に戻り始めたアイリとローゼット。
ロゼの答えにダイヤは、明後日の方向を見ながら。
「え～その…ローゼット様のお洋服は、背丈は合うのですが…バ、バストが小さすぎまして――」
「ぶっぶはははははははは！いつも鎧なんか着てるから潰れちまったか？あはははは、腹がいてぇ～！し、死んじゃうぅ～ふっふっふっふ！」
「――あ、あぅぅ」
「ぐっ～～～～～～～～～～～！！」
物凄く申し訳なさそうに言ったダイヤの言葉に、アイリは涙を浮かべ腹を抱え笑い転げ、ローゼットはと言うと、アイリを睨みつけて、歯が砕けんばかりに食いしばって怒りを抑えている。
墓穴をほりましたねぇ、ローゼット。でも、アイリ、それ以上笑うと首、切り飛ばされそうですよ。
ローゼットが剣の柄に、手を伸ばし始めたのが見え、このままだと話が進まないですね……と思い一度、咳払いをした後。
「二人とも、いい加減にして下さい。客人に失礼ですよ」
私は、眼鏡を押し上げながら、にこやかに……ニコヤカに語りかける。
「ははは・は・はぁーあ～…すまねぇギュラ」
「無様なところを見せた」

再び、シュンと静かになる二人。本当に、ずっとこのままだったら楽なんですが。
さて、それよりも。

「しかし、客人が人狼『ワーウルフ』だとは、正直驚きました」

私は、客人に向き直って問いかけた。

「確か、聞いた話だと、協定を結んで、森で静かに暮らしているのがほとんどだと聞いていたのですが……」

「失礼します、マスター。その様な問い掛けより、最初にする事があると思うのですが」

と、不意にスペードが言葉を遮る。
私は、少し考えた後、『最初にする事』を思い出した。
初対面でコレはなかったですねぇ。

「ふむ、そうでした。どうも気になった事を調べたくなってしまう。魔術師の性分と言うやつです、許して下さい」

人狼に軽く会釈する。
それを見た人狼は、慌てて。

「あ、頭を上げてください。私も、挨拶忘れていましたし…」

人狼は、恥ずかしそうに俯いてしまった。ふむ、取り合えず。
私は、胸に手を当てて、どこかの公爵よろしくお辞儀する。

「ようこそ、魔術師の屋敷へ。私が屋敷の主で、名をギュラード・

ミュラージュと言います。親しい者はギュラと呼びますがね」

それを聞いたローゼット達も、自己紹介し始める。

「私は、主に剣技を教えている。名はローゼット・ヒーリッヒ。ロゼでもかまわん」

「さっきは悪かったねぇ。アタシはぁー…ギュラの用心棒兼武術の師匠、でいいのか？名前はアイリ・オーキンスってんだ。よろしくな」

「我々は、マスターの身の回りの世話をさせて頂いております。私はスペード。隣から順にハート、ダイヤ、クローバーと申します。以後お見知りおきを」

次々、出てくる名前にオタオタしながら人狼は、ギクシャクしたお姫様のようなお辞儀を返して。

「えーと、わ、私の名前は、アビス・ケトープと申します。リュード様にお話したい事があり、ここより遥か北の人狼の村から参りました」

アビスは、ニッコリ微笑んで挨拶を終える。

「――リュード？」

微笑ましく自己紹介していたローゼット達だったが、この名前を聞いた途端、静まり返った。

第三節：来客（後書き）

いかがだったでしょうか？
コメディって難しいですね。知り合いへのツッコミは得意なんですが、ボケるのは不得意です（汗）

評価、感想お待ちしております。

第四節：当主の裏事情。（前書き）

今回は、ギュラの黒い部分が出てきます。
ギュラファンの方、ごめんなさい。ちょっと性格変わってるかも（笑）

第四節：当主の裏事情。

暫く沈黙が続いたが、お茶のご用意を致しますのでどうぞこちらへ。と、スペードの勧めにより、客間に移動する事にした。
薄暗くなり始めた屋敷の廊下をスペードの先導で移動し、決して広いとは言い切れない客間に入室する。
皆それぞれ、部屋の中央辺りに置かれているソファーに腰掛けていく。私が腰掛けた左右に、アイリとロゼが。向かい合う様にアビスが。
暫くすると、銀のお盆に紅茶を載せたスペードが現れ、一人一人にお盆を差し出し、お好みに合わせて、蜂蜜、ミルク、レモンをどうぞ。と、紅茶を勧め始める。
ふむ。この香りは、レモンバーベナティーでしょうか？流石は、スペードですねぇ。先程までバタバタしていましたし、心を落ち着かせる為にも丁度いいチョイスと言えますね。
私は、お茶が行き渡ったのを確認すると、静かに恐縮しているアビスに問いかけた。

「際ほど言っていたリュードと言うのは、リュード・ミュラージュの事でしょうか？」

私の遠慮しがちな問いに、はいっと元気に返事を返してくる、アビス。
しかし、私の態度や周りの静けさをどうやら悪い方向に取ったらしく、はっとした顔になったかと思うと、口を両手で押さえ。
「も、もしかしてもうお亡くなりになられてっ！わ、私そうとも知らずっ」

驚愕し真っ赤になったかと思うと、一気に青くなり、申し訳ありませんっ！と頭を下げてくる。
あはは……どうやら、早合点したようですねぇ。

「落ち着いてください、アビスさん。私の父は、ちゃんと生きてますよ……多分」

私が、苦笑いを浮かべてそう言うと、アビスは、えっ？と私を見て固まり、顔を真っ赤にしたかと思うと、顔を手で覆い隠し、またやっちゃた。私ってば、私ってばと、遂には呪文めいた言葉を囁きながら塞ぎ込んでしまった。あー。なんと言うか、忙しい方ですね。
それを見たアイリは、あはははっと豪快に笑い出し、ロゼは俯き堪える様に肩を震わせた。
私は、そんな二人を一瞥し、苦笑で紅茶に口をつけた。
……しかし、父の名が出るとは。

リュード・ミュラージュ、ギュラードの父であり先代当主。様々な国の神秘に精通し、様々な効用を持つ霊薬・魔薬・魔導具を作り出し、自分にしか扱えぬ魔法まで作り出したとされ、世界からは『歩く神秘』と大げさな物から、『歩く参考書』などと言う皮肉が込められた二つ名が与えられた。
世界でも上位に位置していたリュードだったが、「本で得る知識と実際に経験で得る知識は違う」と言い残し、当時１０歳だったギュラードに当主の証たる宝剣『フロックス』『クリスタロス』託し、ギュラードの母と共に謎の失踪を遂げた。

と、ここまでが世間一般的に言われている事です。はっきり言いましょう。真実は、遠く離れた内容になっています。
真実は、私が１０歳になった翌日の事。行き成り私の部屋を訪ね

てきた父は、これ、１０歳の誕生日プレゼントな。と、何かを投げて寄越した。
渡された物をよくよく見てみれば、それぞれ柄の部分に菱形の宝石が輝く二振りの剣であることが見て取れた。
当家の証たる証『フロックス』と、その妻が持つ事を許される『クリスタロス』、それを手放すと言う事は――
私は、どう言う事だ？と、父を睨みつけるが気にする事無くとんでもない事を言い出した。

――いやなぁ。ギュシカと新婚旅行、行ってなかったから行こうと思ってなぁ。ほら、いろいろ世話なってるし。と言う訳で家の事、頼まぁ。

父は、なんか照れるな、こういうの。と、全く照れた様子も無く頭を掻きながらそう呟くと、呆然としている私に目もくれず、窓に足を掛け外に飛び出して行った。
慌てて、窓から身を乗り出すと、飛龍に跨り遠ざかって行く父と母の姿。
一度、大きく旋回し屋敷の近くを通る瞬間。細かい事はスペードに言ってありますから、安心してねぇ。とエコーを残して母が手を振っていた。

これが、世界の上位に魔術師失踪の真実です。因みに分かっていると思いますがジュシカと言うのは、私の母上の事です。
いやぁ、あの後は苦労しましたよ。父や母でないとこなせない依頼があると丁重にお断りし、どうにかこなせそうな物は私とスペード達でこなし、失踪について聞かれれば根も葉もない事を言って聞かせ、何故か父から送られてくる見覚えの無い請求書の精算しました。
しかし、何なんでしょうか最後の請求書は。当時１０歳でありな

がら、ここまでこなせたのが奇跡的だと言うのに、そんな私に対して。

――クックハハハハハハハハッ。モウ、ナメテルトシカイイヨウガナイデスネ。

「な、なあ。ギュラ？」

アイリの問い掛けに我に返り、隣でソファーに腰掛けているアイリに目を向けると盛大に顔を引き攣らせていた。いや、アイリだけではない。ロゼもアビスに至っては、唯でさえ小さなソファーの隅でガタガタ震えている。

「？　どうかなさいましたか？」

アイリ達のそんな状況に疑問を感じ問いかけるが、ど、どうしたって言われても、なぁ。私に振るなっ！と、やたら動揺するアイリとロゼ。

仕方なく隣に控えているスペードに聞いてみる。気のせいか、さっきいた立ち位置より離れている気がすんですが。

「何があったんですか？」

「マスターがとてもニコヤカに微笑んでいらっしゃったので、皆様動揺していらっしゃるだけだと思われます」

何故、そこで目をそむけるんですか？

「と、取り合えず、アビス。リュードは、故あって不在なのだ。

用件は、ギュラードに言うがいい」

その場の空気を濁すように、ロゼがそうアビスの語り掛ける。何か釈然としないのですが……

リュードがいないと聞いて、落胆した様子を見せていたが、用件を聞いてもらえると聞き安心したのか、ゆっくりと語り始めた。違う何かに安心している気がしないでもありませんが。

「ありがとうございます。ここを伺った用件と言うのは……何者からか村を救ってほしいと言う事なのです」

第四節：当主の裏事情。（後書き）

この話で、初戦闘が書ける所までいけると思ってたんですが、いけませんでした（汗）初挑戦の戦闘なので、是非書いてみたいですっ！そしてきっと、自分の文学の無さに嘆くんだろうと思う私（泣）

では、評価、感想よろしくお願いしますっ！

第五節：思惑（前書き）

ううっ遅れてすいません。再就職、資料集め等でなかなか続きに手が出せませんでした。
相変わらずごちゃごちゃしてますがよろしくお願いします。

第五節：思惑

「何者からか村を救ってほしい。ですか」

ギュラは、そう口にすると、手を口に持っていくと何を考え始めた。

「村を救うたぁ、なかなかデカイ依頼じゃないか」

アイリは、嬉々としてそう呟くと、目を細めてククッと笑った。
そんな呟きを聞いたロゼは、不機嫌そうにキッとアイリを睨みつける。

「貴様、不謹慎にもほどがある。その影で苦しむ者、悲しむ者がいる事を忘れるなっ」

引き起こす側にも…と、何かを思い出したのかそこで話を打ち切ると渋い顔をして視線を逸らし、そんなロゼの反応が面白くなかったのかアイリは、けっ。と、顔を逸らした。
そんな依頼持ってきてしまった手前、目の前で明らかに不機嫌になる二人に、あうあうっと涙目であたふたする、アビス。

「ロゼ。アイリを許してあげて下さい。純粋に大きな仕事が出来て嬉しいだけなんですから。アビスさんも困ってらっしゃいますよ」

流石に見かねたのか、考え込んでいたギュラが苦笑いを浮かべながら仲裁に入る。
端から見れば姉達の仲裁している弟に見えなくも無い。雰囲気や言葉遣いで忘れてしまいそうだが、この中で最年少は、間違いなく

15歳のギュラなのだから。
アビスは、そんなギュラの言葉に渋々といった感じに態度を改める二人を見て、つい微笑ましい眼差しで見てしまう。そんな風に見えてしまったのだから仕方のない事だろう。

「さて、では。先程の話、もっと詳しく教えていただけませんか？」

「あ、はいっ」

不意に、ギュラに話を振られたアビスは、慌てて先の微笑を消し、表情を引き締め語りまじめた。

「近隣の村で、行方不明者が相次いで出たのが事の始まりでした」

アビスの村、イニティウムは首都ロンドンから遥か北にある森の奥深くに存在していた。
その周辺には、人、精霊、幻獣、亜人などが住むいくつもの村があり互いに協力しながら、細々としかし、逞しく生活を営んでいた。
だが、ある時を境にその生活が脅かされる事になる。
濃い霧が発生していたとある夜。突如、亜人の村でボブ・ゴブリンの家族がその姿を消し、更に数日後、今度は人間の家族が姿を消した。それからも、決まって濃い霧が立ち込める日に限っていくつもの家族が姿を消した。
最初の内こそ、家族旅行か何かの用事で家を出たのかと思っていた村の者も、こうも立て続けにしかも、様々な村で失踪が相次いで起きては、異常としか言い様が無かった。
危機感を感じた各村の村長は、会議を開き結果、この地に古くから住み力もあり生命力が抜きに出ていたイニティウムの人狼達が各村周辺の警備をする事に決定したのだった。

「しかし、被害はそれだけでに止まりませんでした」

「……今度は警備する者が失踪を遂げてしまった。ですか？」

アビスの言葉を受け継ぐ様に呟いたギュラの言葉に、力無く頷いてみせるアビス。その顔は、苦痛に歪んでいた。

「馬鹿なっ！軍警察は何をしているのだっそんなに被害が拡大していれば動かぬはずが無かろうにっ」

「ああ、確かになあ。あたし達、『賞金稼ぎ（バウンティハンター）』に頼るより、そっちの方が確実だし、金もかからねぇし」

この世界では、警察と軍は分化されておらず、国家憲兵制度が当たり前なのだ。

その理由とは、分化しても意味を成さないからだ。何せ相手の殆どが特殊能力者であったり、人外ばかりで下手をすれば町が廃墟になりかねない。そんな者達を相手に、わざわざ分化し警察、軍と分け統率を乱すより、元々軍として活動する方が強力な武装が出来るし、統率が執れるに決まっている。

無論、警察の様な組織が無いわけではない。軍が動かない様な小さな事件、警備、取締り等は、民間の警備会社、バウンティハンター、技能管理組合が請け負う事になっている。無論、有料でだ。

「……多分、アビスさんいえ、村長さん方は既に軍警察へ要請しているはずです。でも、断られた。違いますか？」

ギュラの言葉に、はいっと大きく頷いてみせるアビス。ギュラはそれを見て、やはり…と呟いた。

「よー、ギュラ。なんか知ってるのか？軍警、動かねぇ理由」

「知っていると言うかテレビ、新聞等で、掲載されていますよ。かなり小さい記事ですが」

アイリの問いにそう答えると、えっ！と言う顔になる女性陣、それを見たギュラは…見てないんですね。と呆れる。

ギュラは、クローバーにお願いします。と頼むと、ノート型パソコンをテーブルの上に置き操作してみせる。

「どうぞー。今月の初めに掲載された記事でぇす」

クローバーは、細かい文字が表示されたモニターを女性陣に向けてそう言うと、三人は食い入る様に見つめ始める。

「えーとなになに。ギリシャより飛来したセイレン群により、イギリス近海を航行するタンカー、客船、漁船など艦船の被害が深刻化している。あぁ、そう言えば大家のバーさんがそんな事言ってたな」

「これを重く見た政府は、イギリス軍並びに国家憲兵隊の派遣を決定。編成は…」

「……なんだこの編成はッ！国内がほぼがら空きではないかッ」

アイリ、アビスが記事を読み上げ、後ろで黙って読んでいたロゼが、編成の表を見た途端、絶叫する様に叫んだ。

「ええ、ロゼの言う通りです。その『発表』を見る限り、今、国

内にいるクーデター組織を押さえ込む事は、ほぼ不可能でしょうねぇ」

「当たり前だ。こんな編成を発表すれば…ッ！まさかっ！」

ギュラの発表の部分を強調した言葉に、はっとした顔になるロゼ。

ロゼは、神妙な面持ちでゆっくり言葉を紡ぐ。

「……この発表は、クーデター組織を根絶やしにする為の偽装だとでも言うのか？」

第五節：思惑（後書き）

……戦闘が遠退いている気がする。
もう少し、説明文ぽいのが続きますが、お付き合いよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1244f/

我思う、故に我在り。

2010年10月9日03時59分発行